

4. 腓 Solid Pseudopapillary Tumor の 2 例

岡田 忠雄, 皆川のぞみ, 佐々木尚子
佐々木文章
(北海道大学小児外科)
伊藤 智雄
(同 病理部)

症例 1 は上腹部痛を主訴とする 13 歳の女兒。平成 16 年 9 月 6 日入院の上 CT, MRI 検査で腓尾部腫瘍が指摘され手術が施行された。腓尾部より発生し線維性皮膜を有する $5.0 \times 4.5 \times 4.0\text{cm}$ 大, 重さ 56g の嚢胞状腫瘍で病理学的に腓 Solid Pseudopapillary Tumor(SPT)と診断され, 再発なく経過良好である。症例 2 は上腹部腫瘍を主訴とする 11 歳の女兒。平成 11 年 6 月 11 日入院の上 CT, MRI 検査で腓体尾部腫瘍が指摘され, 手術が施行された。脾門部と強固に癒着していたため脾合併腓体尾部切除術を施行した。 $12.5 \times 9.0 \times 3.0\text{cm}$ 大で病理学的に腓 SPT と診断され, 再発なく経過良好である。比較的稀な腓 SPT につき若干の文献的考察を加えて報告する。

5. Stage IV malignant rhabdoid tumor of the kidney の 1 例

山本 雅樹, 黒岩 由紀, 堀 司
畠山 直樹, 水江 伸夫, 鈴木 信寛
小田 孝憲, 工藤 亨, 縫 明大
松野 孝, 平間 敏憲, 高桑 麗子
横山 繁昭, 堤 裕幸
(札幌医科大学小児科)
晴山 雅人
(同 放射線科)

Malignant rhabdoid tumor of the kidney (MRTK) は小児期腎腫瘍の約 1% を占める極めて悪性度の高い腎腫瘍である。過去の報告では stage IV MRTK の生存報告は極めて少ない。近年, 肺転移を伴う MRTK に対して ICE 療法 (Ifosfamide, Carboplatin, Etoposide) と VDCy 療法 (Vincristine, Doxorubicin, Cyclophosphamide) の交替療法が効果的であると報告された。しかし Carboplatin の至適投与量は GFR に応じて調節することが推奨されているため, 今回我々は stage

IV MRTK の 1 例に対して Carboplatin 投与量を調節しながら, ICE, VDC 交替療法と局所放射線療法を行い, 良好な結果が得られているので報告する。

6. 治療に苦慮している macrotrabecular type hepatoblastoma の 1 例

長 祐子, 田中 洋充, 飯塚 進
(北海道がんセンター小児科)
内藤 春彦
(同 外科)
市村 亘
(同 放射線科)
山城 勝重
(同 臨床検査科)

症例は 6 歳, 男児。発熱・腹痛にて近医受診の際, 肝腫大に気付かれ当科紹介。肝左葉に巨大な腫瘍を認め, すでに肝内他区域・肺への転移あり。AFP 40 万。外科切除は困難で, 生検により macrotrabecular type hepatoblastoma の診断を得た後, 化学療法を先行させた。SIOPEL-3 high-risk プロトコールにて治療開始したが効なく, 神経芽腫プロトコール 98A3 に変更。一時 AFP 値の減少をみたが, まもなく再上昇し画像所見は更に悪化した。原発巣の縮小による QOL の改善のため肝動脈化学塞栓療法を施行したが, 転移巣に対する有効な治療がなく苦慮している。macrotrabecular type は 1982 年に hepatoblastoma の一組織亜型として提唱された概念で, 組織学的に成人型肝癌と酷似。初診時, 進行期で切除不能であることが多く, 化学療法に抵抗し予後不良と考えられている。

7. Inflammatory myofibroblastic tumor の 1 例

佐々木 彰, 大久保 淳, 引地 明大
三浦 菜生, 吉田 真, 藤枝 憲二
(旭川医科大学小児科)
中川 温子, 坂田 栄男
(JACLS 病理センター)

症例は 14 歳女兒, 他院にて不明熱の精査で腹部の皮下組織に腫瘍が認められた。炎症反応の上